

2025年4月総評 暮田真名

お祭りの屋台を解体するように
眠った むらさきいろの手招き
小池耕

お祭りの屋台というのは、夜はあれほど光りかがやいているのに、翌朝みると鉄骨は横たえられ、のれんはたたまれ、かなり味気ない。まるで、シーツをかぶっておばけのふりをしていた子どもがシーツを置き去りにして帰ってしまったよう。「むらさきいろの手招き」が呼び寄せるのは、「おばけ」と「シーツ」を隔てる魂のようなものだろう。

入学児石、草、砂とポッケから
海沢ひかり

子供のポケットから砂利、ひからびた草、砂場の砂が出てくる。子供が身近にいればきっと日常茶飯事だろう。しかしこの句に驚きがあるのは、「石、草、砂」とあえて抽象性の高い書き方をすることによって、子供が帽子から鳩を取り出すマジシャンのように見えてくるからだ。

降雪をまねて静かなくちづけに
鹿を想像するなら雄を
芒川良

この鹿は剥製、より正確に言えば、壁から頭だけが飛び出たハンティングトロフィーではないだろうか。下の句に反射して、上の句でキスをしている二人の人間までもが頭だけの剥製になってしまつかのようだ。ほんらい動的かつ情熱的なキスというものを雪という温度のないものに喩え、全体に生氣のなさを漂わせることに成功している。

珈琲の湯気見上げれば剥き出しの
梁私のも見せてあげたい
帆立

「古民家カフェ」というのか、デザイン的な理由であえて梁を剥き出しにしている、おしゃれな空間でコーヒーを飲んでいるらしい。人間の梁とは骨のことだろう。特にやわらかい肺を守っている肋骨は、やわらかい人間を守る建物の梁と特に似ている。肺に届くコーヒーの湯気、建物を抜ける風、さまざまな空気の流れが見える歌。

誰一人来ない倉庫の見張り役

挨拶したい 誰かおはよう

林 淳

「誰かおはよう」のパワーに圧倒された。

横たわるあなたの夜の河を思う

目が明るいと言われてからは

塩本抄

「横たわる」という連体形が「あなた」にかかるのか、「河」にかかるのか。「横たわるあなた」ならば「河」はあなたの身体そのものであり、「横たわる河」ならば「河」はわたしとあなたを隔てるものとなる。「目が明るい」という表現からはあなたがわたしを眩しく感じていることが示唆されており、「夜の河」はその光をときに飲み込み、ときに反射する深淵ではないだろうか。

「俺のため

あるんじゃないんだ天国は」

犬より安いシャンプーを買う

マズルカ

たしかに、犬用のシャンプーのほうが人間用のシャンプーよりも高いこともあるだろう。

(もしかして、ドッグフードのほうが人間のご飯より高いのでは？と思って調べたら思いのほか安かった。「犬に食わせる」という慣用句があるわけだ。)では、天国は犬のためにあるのか？この歌はそういうことを言っているようにも見えず、誰もいない天国が頭の上に浮いている。

冬の歌は嘘が多いね
きみと寝ると
こわれたガラス掃く夢をみる
湯島 はじめ

「ガラスがこわれる夢」でも「こわれたガラスを繕う夢」でもなく、「掃く夢」であるところに目が留まる。ガラスを掃くのがわたしなら、ガラスを壊すのが「きみ」なのだろうか、という想像も働く。しかし、上の句において「嘘」であることを示唆された歌は、ここまで読みを唯一のものではなく、散らばった欠片のなかの一つへと拡散する。

ファルファッレめく唇で死者を
呼ぶ
大西 美優

ファルファッレとは、蝶のようなリボンのようなかたちをしたショートパスタのこと。上下二つのペーツに分かれている唇とファルファッレは、形状の上でつながっている。かたちがにている唇と乾麺のペアは、生者と死者のペアをスムーズに導く。

叙事詩には同じ年しか出てこない
小薬 味

叙事詩といわれて真っ先に思い浮かべるのは古代ギリシャだ。はるか昔と今を卑近な言葉で結びつけるという意味で、この句は「紀元前二世紀ごろの咳もする」(木村半文銭)の系譜にある。実際は叙事詩の中の人物にも年齢差はあるだろうけど、次々と同一年が出てくる、学芸会のような空間を想像するとおもしろい。